

Rachmaninoff

Piano Concerto No.3 in D Minor, Op.30

I. Allegro ma non tanto / II. Intermezzo: Adagio / III. Finale: Alla brece



Hiroko Nakamura, Piano
Evgeny Svetlanov, Conductor
The State Symphony Orchestra Of The U.S.S.R.

CBS 32DC 500 ¥3,200 DIGITAL RECORDING
©1985 CBS/Sony Inc. (P)1985 CBS/Sony Inc./ Manufactured by CBS/Sony Inc.(Tokyo Japan)/ ㊄ CBS Inc./ SONY Sony Corp. (ys)
WARNING: All Rights Reserved. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws.
このディスクを権利者の許諾なく貸貸業に使用することを禁じます。また無断でテープその他に録音することは法律で禁じられています。

Rachmaninoff

Piano Concerto No.3 in D Minor

Hiroko Nakamura, Piano
Evgeny Svetlanov, Conductor
The State Symphony Orchestra Of The U.S.S.R.





©木之下 晃

スヴェトラノフ(右)と中村絃子(1983年秋)

ラフマニノフ
Rachmaninoff

ピアノ・コンチェルト第3番ニ短調 作品30

Piano Concerto No.3 in D Minor, Op.30

- ① I. Allegro ma non tanto (16:08)
- ② II. Intermezzo: Adagio (10:36)
- ③ III. Finale: Alla breve (14:24)

中村絃子=ピアノ
Hiroko Nakamura, Piano

エフゲニー・スヴェトラノフ=指揮
Evgeny Svetlanov, Conductor

ソヴィエト国立交響楽団
The State Symphony Orchestra of the U.S.S.R.

Recorded at Moscow Conservatoire, January. 24, 1985

Producer: Juro Yokoyama

Mixing Engineer: Ken-ichi Handa

Co-operated with MELODIA (Mr. Igor Veprintsev)

Digitally Recorded using the SONY 1610 System

Cover Photographer: Hiromasa Echigo

Cover Art Direction: Akio Nimbari

Design: Tomoaki Sakai

ラフマニノフの魅力

小林秀雄

(作曲家・聖徳学園短期大学音楽科教授)

2メートル近い偉丈夫、12度(1オクターヴ半)がらくに届く大きな手、並はずれて強靱な手首。その容姿にふさわしく、壮大、雄大であった作風と演奏スタイル。

チャイコフスキーの流れをくみ、作曲、ピアノ演奏(そして指揮も!)にプロ中のプロともいべき腕前を持ち、ファンを熱狂させ、堂々と生き抜いたその生涯。

1873年、ロシアのノヴゴロド州オネグに生まれ、1943年カリフォルニア州のビヴァリー・ヒルズで没したセルゲイ・ヴァシリエヴィチ・ラフマニノフ(Sergey Vassilevich Rachmaninoff)いう芸術家が、伝統的な音楽家の条件(とくに作曲家と演奏家が同一人物であるという)を備えた、最後の巨人的存在であったことは、もうどなたもご存知でしょう。

その作品の、音楽としての語り口や作り方には、若い頃から傾倒したチャイコフスキーの影響が色濃く認められるのは事実で

すが、コンサートのプログラムや解説書の一部には、未だに判で押したようにそれを「古くさい」とあげつらう、軽薄さ overwhelm 執筆者が多いことには、大きな憤りを覚えます。一部の(自称)前衛的な行き方や様式だけを新しいと断ずるのは、大きな誤りであります。問題は、それが本物の美であるか否かです。単なる身振り手振りの、意図的な大仰さばかりが目につく作品が多い昨今、われわれは常に人間の文化の本質を、見つめてゆきたいものです。

少々固いお話で恐縮ですがこれはラフマニノフを語る上で、どうしても触れざるをえないことですから、お許し頂きたいと思います。

*

*

*

ご存知のように今世紀に入ってから音楽には、たとえばハ長調、ト短調というように、はっきりした調を感じさせない“無調的”なものや、さらには完全に調を拒否した“12音技法”をはじめとして、さまざまな語り口(語法)が出現しました。しかし、20世紀を40有余年も生きたラフマニノフが、作曲する際そういう語法には見向きもせず、ハッキリした調性をもち、悠々とメロディーを歌い上げる作法をとったので、目先の変化だけを“新しさ”と思い込んでいた人々たちには、「古くさい」としか言いようがなかったのでしょう。

時代の流行を取り入れていれば進歩的だ、というような底の浅い考え方は、もうこの辺りで改めねばなりません。人間の本心に働きかけるものが、真の芸術なのですから。そして、わがラフマニノフの音楽も、まさしくそうした金字塔の一つなのですから。

さて、彼の創作は小品から大作まで、すなわち歌曲やピアノの小曲からカンタータ、シンフォニー、オペラに至るまで、すべてのジャンルにわたる驚くべきレンジの広さを示しています。その中において、彼の天分や持ち味が集約された不滅の記念碑群は、やはりピアノのための音楽であり、さらにその中でも第2番、第3番のピアノ協奏曲はその頂点を築くものといえましょう。映画に用いられてポピュラーになった第2番の、憂いと憧れに満ちたメロディーは、人を魅了せずにはおきません。古来、作法の上でどのような巧みが凝らされていようと、音楽の魅力の最終的、決定的条件は、やはりメロディーです。

チャイコフスキーへの憧憬を生涯持ち続けた彼が、この先輩からメロディーの美学を受け継いだのは、当然と申せましょう。

彼が34才の1907年の作で、2年後ウォルター・ダムロッシュ指揮のニューヨーク・フィルハーモニー交響楽団と共に彼自身の独奏により初演されたこの《第3番》も、各楽章はさまざまな情

感のこもるメロディーの宝庫です。しかし彼はただメロディーを書き流すだけではなく、その正確な作曲技巧を駆使して、第1楽章の主題を、さまざまな装いで第2、第3楽章にも配置し、この類稀なファンタジーに満ちた曲想に、みごとな造形性を与えています。

第1楽章アレグロ・マ・ノン・タントの冒頭、独奏ピアノの両手のオクターヴで、心をこめて弾き出される第1主題はオーケストラに引き継がれ、ピアノはキラキラと彩色します。波のようにうねるオーケストラの間奏の末尾から、ホルンの誘導で第2主題が登場。オーケストラとピアノの軽妙な対話がこの主題の特長ですが、これをピアノがメロディックにパラフレーズしてゆき、オーケストラもそれをもり上げ、頂点を作って提示部を終わります。

次いで冒頭の第1主題が展開部(中間部)の前奏役で現われ、しばらくはピアノの、第1主題によるパラフレーズが進行し、やがて渦巻く嵐のようにもり上がり、それが静まるとやはり第1主題を中心とした独奏ピアノの長大なカデンツが、至難の技巧を織り混ぜた壮大な音群を轟かせます。それがハーブのような音型になり、フルーツを招じ入れ、それをオーボエ、クラリネット、ホルンがリレーしたのち、ピアノが今度は第2主題によるパラフレーズを美しく奏し、ホルンのきっかけて第1、第2主題が復帰します

が、音量を減じてゆき、手短かに楽章を閉じてしまいます。

舞台の照明が慌ただしく消えてゆくような、この心憎い演出により、聴き手の心中には後続楽章への期待が、倍加されることになります。なおこの曲を概観すると(ソナタ形式を踏まえて構成された第1、第3楽章の展開部でさえも)、現われた主題をいろいろな弾き方で長大、かつ壮大にふくらませてゆく(変奏する)のが特長になっており、従って聞きどころもそこにある、と申せましょう。

インテルメッツォ(間奏曲)と題され、A・B・A'の3部形式で書かれた**第2楽章アダージオ**は、心に沁み入るようなメランコリーと、狂おしいほどの激情を湛えた主題が、まずオーケストラによって提示されます。これがピアノに引き継がれ、巨大に変身してゆくさまを全身で受けとめるとき、「ピアノ・コンチェルトの醍醐味まさにここにあり!」と叫びたい思いに駆られます。

中間部は、ほとんど一つの和音^{コード}の延長から成り、それに乗ってピアノの急速なパッセージが、得もいわれぬ幻想の世界を展開します。そのあと主題がオーケストラで再現され、それが終わると荒々しくピアノが登場し、短い超絶的な技巧による絢爛たる“橋”をかけ、そのまま**第3楽章フィナーレ：アラ・ブレーヴェ**(2分の2拍子で)へ進行します。この楽章ではすべてピアノが主導権

をもち、オーケストラを引き廻し、駆り立ててゆきます。

ピアノで提示される2分の2拍子の華麗なマーチの第1主題が、逞しく高潮してゆくさま。シンコペーションのリズムによるダイナミックな第2主題を、ピアノがオーケストラを従えて盛り上げてゆくさま。躍動的な美しいメロディーの第3主題を、ピアノが嬉々として歌い上げてゆくさま——。これらの絵巻をくりひろげて提示部が終わり一旦静まってから、第1楽章の主題たちが登場する中間部に入ります。

まずその第2主題をピアノが高音域でさまざまに変奏。次いでその第1主題をチェロが朗々と歌い上げます。この曲全体の来し方をしみじみと回想するような、ピアノのコラールが中間部の終末を告げ、この楽章の三つの主題たちが戻って来ます。こは、さながら騎馬隊の大軍団の疾駆を思わせる圧倒的な迫力で高潮し、ピアノが再び“華麗な橋”をかけ、二長調の終結部に入り、ピアノ、オーケストラの総力を挙げて堂々と歌い上げる第3主題で全曲の頂点を築き、再度凄まじくテンポを上げ、なだれ落ちるように曲を閉じます。

中村絃子さんへの書簡

類稀な快挙です。中村さんは謙遜しておられますが、このラフマニノフの〈3番〉は、あなたご自身にとっても、日本の楽壇にとっても実に大きな歴史的意義をもつ、感動的な快挙の記録です。あなたは私に、今回の録音・コンサート録画が完了するまでのプロセスを、細かく話して下さいましたが、その中でも印象が深かったのは、ロシアの人々にとって“歌舞伎十八番の一つ”ともいい得るこの曲をその本場に外国人のしかも女性が演奏しに来たという事に対する羨望とでもいう様な視線——（モスクワのピアニストでも、よほどの大物でなければこの曲をこのオーケストラと弾く機会はないのですからそれも当然かと思います。）が感じられたという事でした。従ってコンサートの切符もたちまち売り切れたとのこと。

ところが、あの大柄な楽員たちによる襲いかかるようなオーケストラ（そもそもそのように作曲されているのですが）を向うに廻し、また満座の聴衆の視線にも毅然として、あなたはよくぞここまで、高い完成

度で弾き抜き、演じきったものです。演奏が終わるや否や、その“視線”は嵐のような喝采に変わり、こんどは大好評があなたを取り巻いた——。

しかし、見聞するほどにこの曲は、「ピアノとは、ここまで弾かねばならぬものか」と感嘆せざるを得ない曲です。プロ中のプロでなければ演奏は至難です。女性には減多に手がけ得ないのも頷けます。ところが中村さんは、すでに1978年と1980年のN響の定演でそれをやってのけました。その当時にふり返ってあなたは、「この曲（にアタックすること）で、自分はピアノを弾くということ」が心底からわかった。それまでの自分が、根底から改造させられた。いい換えるとピアニストとして開眼したのです」と私に告白された。

おこがましい言い方ですが、あの輝かしいデビュー以来今日まで、あなたが辿られた自己拡張や自己改革の軌跡の裏側が、私にはよく分かる気がします。あなたはある時点から確実に変わった。並大抵のことでは超えられない線を、あなたが突破したのが、私にはよく分かりました。

現在の中村さんの演奏には、独特の美学があります。あなたは音たちをつねに完全燃焼させる。音に最大限の働きを与え、

音の意味を極限まで表現し尽くす。最弱音や休止符に至るまで、さながら「ブラック・ホールなみ」の質量を注ぎ込む。通常これは怖くてできないし、あなたほどギリギリのところでこれを行なえる人は、いよいよ稀です。大変な直感力と技巧だと思います。

（余談ですが、わが国では未だに指が動くことのみを、ピアノの技巧と思ひ込み、《技巧はあるが内容がない》という批評文句が横行しています。私に言わせれば、《真の技巧がないから内容がない》のです。ピアニストに要求される技巧は、実に広範囲なものだからです。恐るべき「技の深淵」を垣間みたことのない人は、「技」という語を安直に使うものではないと思います）。

雄大さと繊細さを併せもつ、表現レンジの恐ろしく広い、あなたの美学にピッタリのこの〈第3番〉を、暇さえあれば全曲通して練習するという、あなたの並々ならぬ練磨の積み重ね——。だからあなたは「モスクワの視線」に負けなかった。

ではどうかお元気で。またゆっくりお話ししましょう。お料理のときには指に気をつけて。あなたの芸術の光を、ますます輝かせて下さい。

ああ、そうだ。私はここで文字を書き換えねばなりません。無数の中村絃子ファンの喝采をこめて、「中村絃子さん」を「中村絃

子・讃」に——。

1985年7月 小林秀雄

エフゲニー・スヴェトラノフと ソヴィエト国立交響楽団

現代ソ連を代表する指揮者で作曲家。ピアノにも優れる。1928年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院卒業。25才で指揮者としてデビューし、ボリショイ劇場の指揮者として活躍し、1965年よりコンスタンチン・イワノフのあとを継いでソヴィエト国立交響楽団の音楽監督兼首席指揮者となり現在に至る。

モスクワでトップのオーケストラであり、レニングラード・フィルと並んで現代ソ連を代表するソヴィエト国立交響楽団は、かつては力強さのみで押しまくる傾向があったが、スヴェトラノフの力量によって緻密さと洗練さを加え、文字通り世界第一級のオーケストラとして認められている。

来日公演はすでに5回行っているが、その第5回目の来日公演の1983年秋に中村紘子がソリストとして7回の公演を共にし、その際、ピアニスト中村の技巧と音楽性に感服したスヴェトラノフが、モスクワでの同オーケストラの定期演奏会に招聘し、1985年1月25日にモスクワ音楽院大ホールにて実現した。

このコンサートはビデオにも収録され、レコードのための録音は前日の1月24日に行われた。

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

コンパクト・ディスクの優れた特徴

《音が、すばらしく良い》

コンパクト・ディスクは、最新のコンピュータ技術を使った「デジタル」方式。従来のレコード（アナログ方式）では考えられなかったほど、良い音が得られます。

●ピアノシモからフォルティシモまでを、臨場感豊かに再現します。コンパクト・ディスクのダイナミック・レンジ（最弱音と最強音の差）は、90dB以上。この数字の迫力は、コンサート・ホールで聴くオーケストラの演奏が約100dBと言えば、納得していただけるでしょう。

●人間の耳に聞こえる範囲以上の超低音から超高音までを自然な音質で再現します。

●音の歪み率は、従来のレコードの10分の1以下。また、回転ムラによる音の揺れや震えはほとんど無く、とてもピュアで澄んだ音を再現します。

●コンパクト・ディスクは、雑音を徹底的に排除。（SN比は90dB以上）針が音溝をトレースする雑音も無いので、休止部はかぎりなく無音にちかづきました。

《いつまでも変わらない、いい音》

コンパクト・ディスクは、レーザー光線で音を取りだす非接触ピックアップ。針を使わないので、音溝がすり減るようなことはありません。また、信号が刻まれた面はプラスチックの膜で覆っており、直接触れることができません。だから、汚れにも強く、いい音がいつまでも変わりません。

《ポケットにも入る、コンパクト・サイズ》

コンパクト・ディスクは、シングル盤より小さく、カセット・テープより薄い。持ち運びが簡単で、収納スペースがぐんと少なくてすみます。

《扱いカンタン》

プレーヤーへのセットは、片手でポン。演奏のスタート、ストップ、選曲、頭出し、繰返し演奏などの操作は、ボタン1つですぐOK。デジタルならではの簡単操作ですから、どなたにも気楽に使っていただけます。

取扱上のご注意

- ①レーベルの反対側の光った面にレーザー光線をあてて信号を読みとりますから、この面を汚したり傷つけたりしないようご注意ください。
- ②汚れがついたときは、柔らかい布で軽く拭きとってください。従来のレコード用スプレーやクリーナーは、使わないでください。
- ③ディスクを拭く場合は、円の中心または外側に向かって布を動かします。円周の方向には拭かない方が安全です。
- ④レーベル面に鉛筆、ボールペンなどで文字や記号を書きこまないでください。
- ⑤演奏後は、プラスチック・ケースに収め、高温多湿の場所を避けて保管してください。